

## 4月7日 復活節第2主日

使 5:12～16 黙 1:9～19 ヨハ 20:19～31

### 1. ヨハ

v.21-22 「イエスは重ねて言われた。“あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。” そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。“聖霊を受けなさい。”」

“使徒”という呼称は原始教会において、厳密には“復活の主を見た”(I コリ9:1, 15:3-10)、そしてイエスから直接福音を委ねられた(ロマ1:1、ガラ2:7-8) 12人とパウロに限定して用いられ、教会が使徒や預言者という土台の上に建てられていると言う場合にも(エフェ2:20)、そのような厳密な意味で述べられたものと思われます。

それ以降の信者は“キリストを見たことがないのに信じている”(I ペト1:8)のですが、それは使徒たちに起源する福音の宣教によるのであって(ロマ10:8-17)、やがて教会はこれを新約聖書という形で、他の諸文書から区別して成立させます。もちろんこれと並行して、福音の伝承はその後の教父たちによって受け継がれて来たので、カトリック教会は啓示伝達の器である聖伝と聖書を“いわば鏡のようなもの”(神の啓示に関する教義憲章7)として共に大切にしているのです。

そのような訳で、今日まで教会が受け継いで来た“使徒たちの宣教した福音”を、私たちが熱心に聞いてこれを学ぶなら、それは今も「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ1:16)であって、人に罪の赦しを与え、からだの復活と御国を受け継ぐ希望を約束します(エフェ1:13-14)。復活のイエスにお会いした弟子たちの物語りは、そのような福音宣教の起源を語っているのです。

v.31 「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」

### 2. 黙

v.9 「わたしは、神の言葉とイエスの証しの故に、パトモスと呼ばれる島にいた。ある主の日のこと、・・・」

使徒ではなくて、それに続く時代の教会の指導者の一人であった人が、迫害の時代に自分の教会から追放されてパトモスという島にいました。彼はそこで主の日に天上の典礼の幻を見て、それをアジア州にある七つの教会へ書き送りました。彼は自分の出身地の諸教会に、主日のミサが十字架のいけにえの秘跡的再現であること、それがキリストの行為であり、同時に私たち祭司の民の奉仕であることを証しました(1:6, 5:6-14)。これがヨハネの黙示録と呼ばれる文書の由来です。

「このような偉大なわざを成就するために、キリストは常に自分の教会と共に、特に典礼行為に現存し

ている。キリストはミサの犠牲のうちに現存している」(典礼憲章 7)と、現代の教会が証しするのも、同じ使徒たちの宣教に起源を持つ教えであって、復活の主から直接福音を委ねられた使徒たちの宣教に基礎をおいているのです。

使徒たちの宣教がなければ、使徒後の教父たちによる福音の伝承も、そして聖書も存在しなかったであろうし、もしそうであれば、現代の教会の宣教も空しい作り話になってしまいます。もしキリストの受難と死、復活と昇天がなかったら、使徒たちの宣教も空しい幻想であったこととなります。しかし使徒たちは、「神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です」と大胆に宣教しました(使 1:8, 2:32, 3:15)。この復活のイエスが、黙示録の著者を、そしてその後の時代の教会の証し人たちを“使徒たちの宣教の継続”へと導かれたのです。

### 3. 使

v.12 「使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われた。」

ごく早い時期から教会は、各地の教会の司教たちを使徒の後継者と位置づけて理解するようになりました。そのことによって、“キリストから使徒たちに委ねられた神的使命は、世の終わりまで続く”ことを、教会は信じたのです(教会憲章 20)。この崇高な任務を果たすための“たまものは、司教聖別においてわれわれにまで伝えられてきている”と、カトリック教会は固く信じています(教会憲章 21)。

しかし、代々の時代の司教たちは使徒の後継者であって使徒ではないということも、同時に正しく認識されなければなりません。教会は最初の使徒たちに託された福音の教えから、いささかも逸れることなく、聖霊の導きの下に忠実にこれを保ち、説教して行かなければならないのです(神の啓示に関する教義憲章 9,10)。

このような最初の使徒たちの特別な権威を、聖書は「主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりとお示しになった」(マコ 16:20)と、証言しました。ですからこのテキストに描かれている奇跡も、そのような福音宣教に伴うしるしであったことを理解しましょう。

この使徒たちの後継者である現代の司教たちを、そしてローマ教皇を、主が祝福して用いてくださいますように。私たち信徒一人一人が、カトリック教会の主日ごとのミサで、司教とそれに従属する司祭の口を通して“神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを…… 力強く証しする”(使 20:21)説教を、いつもはっきりと聞くことが出来ますように。「主が来られるときまで」(1コリ 10:26)。

ハレルヤ、アーメン。

## 4月14日 復活節第3主日

使 5:27～42 黙 5:11～14 ヨハ 21:1～19

### 1. ヨハ

v.7 「イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、“主だ”と言った。」

ヨハネ福音書の21章は独立した伝承であって、それまでの物語りの続きでないことは、注意深い読者ならすぐに気づくことです。13節までの部分は、明らかに原始教会のミサを念頭にして物語られていて、人々が日常の生活からそこに呼び集められる主日のミサが何を意味しているかを、非常に明確に説明しています。“イエスの愛しておられた弟子”(v.7)とは、1～20章の著者を指していて、私たちのミサで起こっていることは、このような使徒の証言によって指し示された復活のイエスにお会いすることなのだと言っているのです。

v.9 「陸から上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」

祭壇の供え物はすでに準備されていて、彼らの労働の実りもこれと一つに結ばれるために祭壇に運ばれます(v.10)。ミサに集まる会衆のだれもが、私たちの救い主であり死者の中から復活されたイエス・キリストを知っているのだから、だれも「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしない(v.12)。

v.17 「ペトロは……言った。“主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。” イエスは言われた。“わたしの羊を飼いなさい。”」

教会憲章は、キリストがペトロを他の使徒たちの上に立てたことと、ペトロの後継者であるローマ教皇の聖なる首位権について述べていますが(18)、このペトロの上に建てられた教会はペトロと共に、“キリストを愛しています”とミサを通して表明します。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」(ヨハ6:68)

聖ペトロが葬られた墓へ案内された新教皇フランシスコが、4月1日上記と、「あなたはメシア、生ける神の子です」(マタ16:16)を含む三つのペトロの信仰宣言を唱えたと報じられていますが、これが共にミサをささげる私たちすべての会衆の信仰宣言でもあることを、深く思いましょう。

カトリック教会では、信徒が御聖堂に入るとき、出るとき、また御聖堂の中で祭壇の前を横切るときには十字架のしるしをしますが、これが復活のイエスの臨在に対する表敬であることを忘れてはなりません。小学校や中学校で生徒たちに、職員室への出入りに際してお辞儀をさせたりするのは、全く次元の違うことだからです。

### 2. 黙

v.12 「屠られた小羊は、力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です。」

v.13 「玉座に座っておられる方と小羊とに、賛美、誉れ、栄光、そして権力が、世々限りなくありますよ

うに。」

第二バチカン公会議で制定された典礼憲章は、その性質上、ローマ典礼様式についてだけ定めていますが、伝統の精神に従った他の典礼様式の存在も認めています。東方教会の伝統や、また新約聖書から伺い知る初代教会時代の様式の断片を、カトリックの典礼学は大いに重視して現在に至りました。

上記の二節の他に、7:12, 11:17, 15:3, 19:5-8などに当時のミサ曲の材料が見出され、それらはすべて、キリストがその最終的な再臨を先取りしてミサに現存されるという信仰を反映しています。そのようなキリストの現存のリアリティーが生き生きと表現され、また体験されることの大切さをカトリック教会は確かに知っていればこそ、古くからミサ典礼書によってその実践基準をうち立てて来ました。

ですから、そのような神学的訓練はミサを司式しこれに奉仕するすべての人々にとって必須のものであって、それを前提にして、「他の何人も、たとえ司祭であっても、自分の考えで、典礼に何かを加え、除去し、変更してはならない」(典礼憲章 22)と定められているのです。

ミサは、教会の最後の完成の先取りであり(典礼憲章 8)、そこに現存される方は私たちすべての者の審判者である「屠られた小羊」であることを(ロマ 14:11-12)、すべての会衆は「畏れつつも喜びに輝いて」(イザ 60:5)賛美するのです。

### 3. 使

vv.31-32 「神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証ししておられます。」

ミサとは私たちが、使徒たちの証言によって指し示された復活のイエスに、秘跡的な形でお会いすることであるという理解が、現代の教会で再認識される必要があります。教会が年ごとに復活の祭儀を祝うのは、教会が聖伝と聖書を通して使徒たちの証言を聞いているからであって、復活の主は今もそこに司祭の奉仕を通して現存されます(典礼憲章 7)。この使徒たちの証言を離れては、最早そこには「民は座って飲み食いし、立って踊り狂った」(I コリ 10:7)とあるような“お祭り”だけしか残らないのです。

使徒たちによって伝えられた福音が“純粹に”“正しく”説教され、この福音に従ってキリストのいけにえが奉獻されることによって、その奉獻に私たちが一つに結ばれるミサに、豊かな祝福がありますように。

ハレルヤ、アーメン。

## 4月21日 復活節第4主日

使 13:14～52 黙 7:9～17 ヨハ 10:27～30

### 1. ヨハ

v.28 「わたしは彼らに永遠の命を与える。」

聖書の物語りは、福音書で、あるいは使徒言行録で終わっているわけではありません。キリストの生涯の物語りの後に、人間の偉大な宗教の物語りが始まったわけではありません。救済史は終わったのでも中断したのでもなくて、神は歴史を栄光の終わりまで導かれるのであり、永遠の命は信じる者を神の国へと復活させる新しい命なのです。

v.28 「彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」

聖書は、使徒たちの宣教した福音を今日に伝える書物ですが、その宣教は非常に大胆に当時の神話的表現や黙示文学的表現を用いて語られました。恐らくそれが神の“秘められた計画”(ロマ 16:25、エフェ 1:9)を説明するために、唯一の最も適切な表現であったからです。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。」(v.27) キリストの福音を説明して人に理解させるのは聖霊の御業でありますから(ヨハ 14:26 参照)、浅はかな人間の知恵で現代風に合理化したり精神化したりしてしまってはなりません。

永遠の命が、その救済史的展望から切り離されて、ただの心の中の精神的な事柄として解釈されたり、あるいは社会的な革命思想の動機付けに利用されたりするのを、私たちはあまりにも多く見て来たのではないのでしょうか。

しかし、復活して今は神の右の座に着いておられるキリストが、聖書を通して今朝私たちに語っておられるのです。「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」(10:10) 「わたしはその人を終わりの日に復活させる。」(6:54)

### 2. 使

v.43 「…… 神の恵みの下に生き続けるように勧めた。」

使徒たちの宣教によって「主の言葉」(w.44,48,49)、「神の言葉」(v.46)を聞き、それを理解した人々に対してだけ意味を持つ励ましがここで語られています。それは「救いの言葉」(13:26)であって、旧約聖書で語られていた大いなる約束(13:23)、神がイエスを復活させて実現された福音(13:32-33)であります。復活の主は生きておられ、「この方による罪の赦し」(13:38)の宣教の主体として教会と共に働き(マコ 16:20)、永遠の命を得るように定められている人々を信仰へと導かれます(v.48)。

このように、神の恵みにより、信仰によって救われた(エフェ 2:8)人々に対してだけ、「御国を受け継ぐ保証」(エフェ 1:13-14)が与えられ、“信仰に踏みとどまり、福音の希望に生きるように”(コロ 1:23)という勧めの言葉が意味を持って語られるのです。



## 4月28日 復活節第5主日

使 14:21～27 黙 21:1～5 ヨハ 13:31～35

### 1. ヨハ

vv.31-32 「さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。“今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。”」

ヨハネ福音書は、それが書かれた一世紀末の教会の信仰が、主が渡された夜の出来事に固くと結びついていることを強調しようとしているように見えます。イエスは罪と死と悪魔に勝利して復活し、今やその方による罪の赦しが宣教されて(ルカ 24:47、使 13:38)、その栄光は信者たちの心の中を照らしていました(II コリ 4:6、エフェ 5:14)。そのような罪の赦しの共有は「神の恵みにより無償で」(ロマ 3:24、エフェ 2:8)与えられたものであって、純粹に神の賜物であることを強調して、繰り返しイエスの受難物語りは語られたに違いありません。

そのように、現代の教会のミサで聖書が朗読されるときにも、私たちは教会の信仰がイエスの死と復活による罪の赦しの福音に基づいていることを覚えて、一同で感謝してアーメンと唱えます。このような教会の信仰が明確であってこそ、互いに愛し合いなさいというイエスの「新しい掟」(v.34)は“教会を造り上げる”(I コリ 14:4)いわば合い言葉になります。そうでないと、ただの道徳、善意の人の美德に過ぎなくなってしまふことを、これまで私たちはあまりにも多く見て来たのではないのでしょうか。

「わたしたちの罪ではなく教会の信仰を顧み、おことばの通り教会に平和と一致をお与えください。アーメン。」(教会に平和を願う祈り)

### 2. 黙

v.4 「…… 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。」

カトリック信者はすべて、“ミサが本質的にいけにえであること”、“十字架上のいけにえと、ミサにおけるその秘跡的再現は、奉獻のしかたを除けば同一のものであること”を信じる人々であります(総則/前文 2)。このミサの“感謝の典礼”の中で主の祈りが唱えられ、会衆は「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます」という副文を唱和します。

このような典礼行為がマンネリ化し、ただの儀式のようになってしまふ誘惑に対して、教会は昔も今も戦わなければなりません。 “感謝の典礼”と並んで“ことばの典礼”が車の両輪のように大切にされるようになったのは、現代の典礼刷新の貢献であります(典礼憲章 35、総則 8)。見者ヨハネが彼の生きている時代に対する典礼の真の意味を示されたのは、パトモスという島に流されて、主日に故郷の教会のミサのことを黙想していたときのことでした。彼はこの見たすべてのことを、故郷アジアの教会の覚醒のために、

黙示録によって証しました(1:1-3)。

「地上の典礼において、われわれは天上の典礼を前もって味わい、これに参加している。」(典礼憲章 8)  
この天上の典礼を彼は幻に見ました(v.1)。それは、この天上の典礼を待ち望んで(ヘブ 11:1)、「大きな苦難を通して来た者」(7:14)たちの目から、神が彼らの涙をことごとくぬぐい取ってくださる、天上の新しいエルサレムの幻でありました。

私たち現代の教会は、今もそのような涙を流して共にミサをささげている群衆、天上の典礼を待ち望む信徒の集まりであるだろうか、反省してみなければなりません。「互いに愛し合う」とは、このような涙を共有しているということのはずだからです。

### 3. 使

vv.26-27 「そこは、二人が今成し遂げた働きのために神の恵みにゆだねられて送り出された所である。到着するとすぐ教会の人々を集めて、神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。」

パウロとバルナバは“神の言葉”(13:5)“救いの言葉”(13:26)、すなわち“キリストによる罪の赦しの福音”(13:38)を告げ知らせ、第一回目の伝道旅行から帰って来ました。

カトリック教会においては、神の言葉をミサで説教する権威は、教導職だけに保留されていますが、それは主から委ねられたこの務めが、彼らにとってひととき重要なものであると、古くから教会が理解して来たからです。ですから教会はすべての司教と司祭たちに、“私は神の言葉を説教するために献身して、司教あるいは司祭に叙階されたのです”という確信を期待しているのです。私たちの属する小教区でも、自分たちの神父の説教のために、私たちは心から祈ろうではありませんか。私たちが何よりも先ず、他の多くの活動に先んじて、ミサを通して神のこぼる食卓の富に豊かに与ることが出来るために(典礼憲章 7)。

ハレルヤ、アーメン。